The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	心への関心　知覚と表象についての言説を通覧する
Author(s)	吉田，耕太郎
Citation	大阪大学大学院文学研究科紀要．2022，62，p．59-72
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/87420
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

心への関心　知覚と表象についての言説を通覧する

吉 田　耕太郎

はじめに

『不名誉ゆえの犯罪者』（1786）と題された犯罪者心理を題材とした小説のなかで、作者シラーは、歴史家を火山調査する地質学者になぞらえ、犯罪行為の理由を、犯罪者の心のうちに探究する必要があると記した。またラーファターは『観相学断片』のなかで、表情の美しさの原因としてその人物の道徳的な善良さを指摘し、人間の外面と内面とを結びつける思考を表明している[1)]。バーバラ・マリア・スタフォードは、可視の手がかりでもって、不可視の心的性質を精査する点に18世紀の知的傾向を認め、その最たる例として観相学をとりあげた[2)]。確かに、18世紀中葉以降、行為や表情の原因として心が探究されるようになったが、心というものの存在を素朴に前提してはならない。フーコーが裁判制度と心理学という異質な領域がカップリングすることによってはじめて、犯罪の原因が心に求められるようになったと論じたように、行為や表情の原因を探る試みのなかで、心という新たな領域がひらかれてきたと、考えなければならない。心という探究領域の誕生を、当時の人間学や心理学の言説のうちに確認することが本稿の目的である。

1 感傷性、柔和さ

感傷性や多感性という訳語があてられるEmpfindsamkeitを手がかりに、心への関心をたどる糸口を探ることにしたい。歴史的にさかのぼってみると、感傷性とその形容詞である感傷的empfindsamという語は、英語sentimentalの訳語として新たに登場し、1770年代から80年代にかけて、その語を冠した書籍の出版ブームを迎えたことからも、当時の流行語であったことがわかる[3)]。感傷性は、文芸上の潮流を示す言葉であるが、同時代の心理学や生

1） Johann Kaspar Lavater, *Physiognomische Fragmente*, Bd.1, Leipzig und Winterthur 1775, S.63ff.
2） バーバラ・マリア・スタフォード『ボディ・クリティシズム』国書刊行会 2006, pp.121f.
3） *Anhang zu dem ersten bis zwölften Bande der allgemeinen deutschen Bibliothek*, 2. Abt., S.898ff; Vgl. August Koberstein, *Grundriß der Geschichte der deutschen Nationalliteratur*, umgearbeitet von Karl Bartsch, 3. Band, 1. Theil: Vom zweiten Viertel des achtzehnten Jahrhunderts, S.463.

理学とも結びついた語であった。

感傷性という語は、感情、感性、多感といったものを重視する時代的な雰囲気を言い当てた言葉であるが[4)]、そもそも「受容する」や「受け取る」といった意味の empfangen、この語の受動的な意味から、刺激を受容するという意味での知覚 Empfindung とも意味的な連関を有する語であり、18 世紀には、刺激を受容しうる身体や心の能力が発揮されている状態を意味していた。

イェーガーそれからザウダーの研究によれば、感傷性は、心が揺り動かされている状態、心の動きに関連した用語であると[5)]、その心理的な含意が強調されている。したがって、感傷的な文芸作品は、登場人物の感情の動きがことさら描写され、読者がこの感情の動きを追体験するという読書体験をねらった作品であったことになる。さらにこの二人の研究者が指摘するのは、感傷性においては、心理的な意味だけではなく、道徳性も含意されていたという点であった。

イェーガーとザウダーはともに、感傷性に、「心の柔和さ」を意味する zärtlichkeit の意味が流れ込んでいることを、史料をもとに跡付けている[6)]。「柔和さ」とは、そもそも目に見える身のこなしや会話の柔らかさ、とりわけ異性に対する巧みな対応の形容であったが[7)]、柔らかい身体や心は「外からの刺激を容易にうけとる」[8)]という比喩的な意味が定着し、心の柔らかさという人間の心的性質を表現する語になった。この刺激を受けやすい柔和な心は、刺激が心地よければより刺激を受けるようになる。そしてこの感覚的な快適さを与えるものは、道徳的な善良さも兼ね備えているにちがいない。このように感傷性は、モラルセンスつまり道徳的な善を感知しうる心の状態を意味するようになった。感傷性が含意するこのような道徳性を批判したのが、疾風怒涛のような新たな文学的潮流であった[9)]。

「柔和さ」を論じたミヒャエル・リンゲルタウベは、苦痛を避けて心地よい刺激を求める欲求 Triebe を人間に認めたうえで、人間に心地のよさを与えるものは、同時に、真なるもの、善なるもの、美的なもの、完全なものであると説明する[10)]。あまねく人間には知覚する能力が与えられているが[11)]、万人が善や美を受容できるわけではない[12)]。必要なのは、柔和さ、

---

4) Cf. 広瀬千一『シュトルム・ウント・ドランクと Empfindsamkeit』大阪市立大学文学部紀要、第 47 巻（1995 年）、pp.39-52.
5) Georg Jäger, *Empfindsamkeit und Roman*, Stuttgart 1969, S.16f.
6) Gerhard Sauder (Hg.), *Theorie der Empfindsamkeit und des Sturm und Drang*, Stuttgart 2003, S.14.
7) Vgl. Burkhard Meyer-Sickendiek, *Zärtlichkeit*, Paderborn 2016, S.105ff.
8) Johann Christoph Adelung, *Grammatisch-kritisches Wörterbuch der hochdeutschen Mundart*, Seb-Z, Sp.1655.
9) Vgl. Jäger, a.a.O.,S.27.
10) Vgl. Ringeltaube, *Von der Zärtlichkeit*, Breslau und Leipzig 1765, S.4f.
11) Ringeltaube, a.a.O.,S.10.
12) Ringeltaube, a.a.O.,S.49.

つまり刺激の受けやすさである。刺激を受けやすい人は、心地のよいものつまり善なるものの刺激を容易に受けとる能力を有する者である[13]。この心の柔和さは、共感して受け取ることdie sympathetischen Empfindungenであるとも説明されている。心の柔らかな人は、痛み、悲しみ、哀れんでいる人を目にすると、強い共感が引き起こされて、その人のそばにいたいと思うような人なのだ[14]。ここで心の柔和さが、道徳的行為の原因になっていることが確認できるだろう。リンゲルタウベの議論は、善の実在論を前提とするものであったが、善き刺激を受けとる道徳的な人間という理解が、美的教育の必要性、悲劇における共感、さらには宮廷における礼儀作法に対抗する市民的な理想的な人間関係[15]といったこの時代のいくつかの議論の下地となっていたことを、私たちは理解できるはずだ。

更にリンゲルタウベは、単に刺激を受けやすいだけであれば、善ならざるものも受容することになると、柔和さは、刺激が善いものであるかどうかを知覚しwahrnehmen、判断beurtheilenする軽妙さも兼ね備えている必要があると説明している[16]。柔和な心に備わった刺激や判断といったメカニズムには、生理学や心理学からの影響を認めることもできる。

このように感傷性には、身体的な刺激を受けとるという生理学的な意味が重なりあっていたことから、刺激を受けやすい多感状態や限度を超えた感情過多な状態が、感傷性には流れ込むことにもなった。ザウダーが指摘するように、感傷性に入り込む感覚や感情の過剰さに対しては、道徳性を高く評価していた啓蒙思想家や教育者たちが批判を向けることになった[17]。

例えばラムラーは、感傷的empfindsamという語が流布しすぎて、単に刺激を受けている状態を意味するようになってしまったと、語義の変化を認めた上で、刺激を感受する感受的empfindlichと感傷的とを区別するよう提案している[18]。同様の再定義は、1802年に発刊されたエバーハルトの類義語辞典にも確認できる。「感受性Empfindlichkeitは、心地よい刺激と不快な刺激の双方を受け取る幅広い能力のことである。ただし感受性はむしろ悪い意味で使用されており、それに対して、感情Gefühlや感傷性は良い意味で使用されるものだ」[19]。感受性の強い人間は、ささいなことにも過度に反応するが、感情豊かで感傷的な人間ein gefühlvoller und empfindsamer Menschは、共感なくして他人の窮状を見ることのできない人間である[20]。

このような感傷性の道徳的な含意の再定義が試みられた一方で、生理学的な意味を積極的

---

13) Ringeltaube, a.a.O.,S.98.　14) Ringeltaube, a.a.O.,S.95.
15) Nikolaus Wegmann, *Diskurse der Empfindsamkeit*, Stuttgart 1988, S.56ff.
16) Ringeltaube, a.a.O.,S.90.　17) Jäger, a.a.O.,S.15f.
18) Karl Wilhelm Ramler, Von der Bildung der Deutschen Beywörter, in: *Beiträge zur deutschen Sprachkunde, Vorgelesen in der Königlichen Akademie der Wissenschaften zu Berlin*, 1. Sammlung, Berlin 1794, S.160-213; S.191.
19) Eberhard, *Synonymisches Handwörterbuch der deutschen Sprache*, Halle 1802, S.584.
20) Ebd.

に取り入れた定義も確認できる。ハインリヒ・マルティン・ゴットフリート・ケスター編の『ドイツ百科事典』では、「感傷性を批判する人は、そもそも何を言っているかわかっていない。美そして善へと向かうある適度の感傷性を有することは、人間の道徳性を改善するうえで欠くことのできないことだ。さらに重要なのは、人間は、生きている限り誰もがそれぞれ異なる欲求を持つものだし、その心は知覚 Empfindung に流されてしまうこともある。これらの調和的な混在が、その人物にふさわしい性格を形作ることになる」[21)]。つまり「思考ばかりして、感覚をしない者は、感傷性をあたかも自分の欠点であるかのように恥じているし、また知覚ばかりして、思考しない人は、心を支配する感覚的な欲を感傷性と混同している」[22)]と、感傷性について定義している。ケスターは、感傷性の道徳的な価値を認めつつも、人間が道徳性には相いれない感覚に流されることを認め、双方のバランスをとることを提案しているといえるだろう。道徳と非道徳のバランス維持の機能を人間の心に認めるケスターの立場は、人間が理性を完全に働かせるならば真理や善に到達できるとする啓蒙思想が前提とする人間理解とは、異なるものであった。

2　知覚と表象

感傷性に流れ込んでいた知覚 Empfindung へと考察をうつすことにしたい。ドゥルベックは、心身問題への応答のなかで、知覚が、外からの感覚的刺激と心の内なる状態の双方を意味するようになったと指摘している。18 世紀になると心身問題は、機会原因論や予定調和説のような神の仲介でもって解決されることはなく、身体と心の間を動物精気や神経液のようなものが機械論的に媒介すると考えたこの時代の生理学モデルで、処理されるようになったと論じている[23)]。

ハレ大学で医学を教えたエルンスト・ダニエル・シュタールは、機械論的な身体に心的な活動力を認めるアニミズムの立場をとったことで知られる。アニミズムとはいえ、シュタールは、「心の動きと身体の機械的な動きの一致 Gemeinschafft が、どのような理由で生じるのかについては言及しない」[24)]と、心身問題を真正面からとりあげてはいない。シュタールは心を、身体とは異なる実体ではなく、生理学的な知覚現象として説明を試みている。

まずシュタールは、当時の生理学の知識を動員して、「あらゆる知覚は繊細な運動 subtile

---

21) Henrich Martin Gottfried Köster, *Deutsche Encyclopaedie oder Allgemeines Real-Wörterbuch aller Künste und Wissenschaften*, 8.Bd., Frankfurt 1783, S.340f.
22) Ebd.
23) Gabriele Dürbeck, *Reizende und reizbare Einbildungskraft - Anthropologische Ansätze bei Johann Gottlob Krüger und Albrecht von Haller*, in: Jörn Steigerwald und Daniela Watzke (Hgg.), *Reiz, Imagination, Aufmerksamkeit*, Würzburg 2003, S.225-245.
24) Georg Ernst Stahl, *Stahls neu-verbesserte Lehre von den Temperamenten*, Leipzig 1716, S.75.

Bewegung によって生じる」[25]と定義する。この微細な振動は、体液（血液、リンパ液、水分）によって伝えられる運動である。感覚器官が受けた刺激としての知覚と、心で生じるその刺激についての知覚が、身体レベルの微細な運動として斉一的に説明することで、心と身体を異なる実体と考える伝統的な立場をシュタールは転倒させていたことがわかる。この知覚の器官 Empfindungs=Werk=Zeug でうけとった知覚は、身体の動物的な運動によって心に伝わり、そして心もまた知覚の運動を通じて身体へ働きかけることになる[26]。このように、知覚という身体を通底する微細な運動を介することによって、心は感覚器官の刺激を受けとることができるし、心が身体を動かすこともできるようになる。この微細な運動が途切れることなく続いていることが、身体をただの機械ではなく生きた身体にしているアニミズム的な原理であった[27]。

このようにシュタールは、観念や表象を抱くという心に伝統的に認められてきた能力を、知覚という身体的な次元の運動へと解消した。キリスト教的人間観においては、観念を抱く、または知性的な推論をおこなうといった心に固有の活動は、心の不死を約束する性質であったことを思い起こすならば、シュタールの生理学は、キリスト教的な死生観に対しても批判的な意義を有していたことを読み取ることができるだろう。

シュタールの同僚でもあった機械論者のフリードヒリ・ホフマンは[28]、彼の教え子ヨーハン・ゴットローブ・クリューガーの『自然学』によせた序文のなかで、人間には理性があるとしても、その理性の機能は身体の病で奪われてしまうことがある。人間の心は、動物に認められる心と同じようなものであって、特定の条件が整った場合にのみ、理性と呼ぶような状態が発揮されるにすぎない[29]と述べている。このように心を身体という機械の一部として説明することで、ホフマンもまた、心身問題を正面から扱ってはいない。

教え子のクリューガーは、心の活動を、知覚に随伴する表象として説明していた。「何かを知覚する empfinden と、第一に、神経のなかに運動が引き起こされるはずであり、この運動には、活き活きとした表象が伴う。また逆に、活き活きとした表象が起これば、神経の中に微細な運動が生じる。このように微細な運動と、活き活きとした表象は互いに結びついている」[30]。心に固有の活動としての表象を認めてはいるものの、クリューガーは、音を出

---

25) Stahl, a.a.O.,S.31.　26) Stahl, a.a.O.,S.77f.

27) Cf. Elisabeth Haigh Xavier, *Bichat and the medical theory of the eighteenth century*, in: *Medical History*, supplement 4 1984, p.27.

28) シュタール、ホフマンをはじめとするハレ大学における生理学の思想史的な意義については以下の研究を参照。John H. Zammito, *The gestation of German Biology*, The University of Chicago Press 2017, Ch.1.

29) Fridrich Hoffmann, in: Johann Gottlob Krüger, *Naturlehre*, 1.Aufl., Halle 1740, Vorrede.

30) Krüger, *Naturlehre*, 2.Theil, 2.Aufl., Halle 1748, S.83f.

す物体とその音を伝える空気の振動を例に出して[31]、知覚と表象との間には関係 Zusammenhang があるということがわかれば十分であって、それを根本的な真理として受け取るように主張している[32]。何かを知覚すれば、その何かについての表象またはそれに似た表象をもつことは日々の経験[33]からも明らかで、私たちは脳の一部を切除して、脳のどの部分で表象が生じるのかを確かめる実験 Experimente[34]はできないのであるから、これ以上の無駄な議論はやめるべきというのだ。クリューガーの態度には、ガイアー＝コルデシュが指摘しているように、心身問題も実験や体験に基づいて探究されなければならないとする、この時代の科学的思考の優位を[35]見て取ることができるだろう。

人間の知性的な活動を象徴する抽象的表象についても、クリューガーは、身体レベルの機械論で説明していた。そこで持ち出されたのが、万人が体験したことのある夢であった。夢のなかで算術をするという彼自身の体験をもとに、夢のなかでは幾何学や算術をおこなうことが可能だと論じる[36]。この夢が実話なのか創作なのかわからないが、夢は、身体が活動していない睡眠時に生じる表象、同様に抽象的な思考もまた身体の知覚が僅少となる条件において可能となる心的現象であるとクリューガーは説明するのだ。

知覚や表象のメカニズムを論じつつも、心のあらたな領域を示唆したのがクリューガーのもとで学んだヨーハン・アウグスト・ウンツァーであった[37]。ウンツァーは、人間身体の生理学を論じた書物の中で、知覚と表象の間の協働 Mitwirkung を説明する。「動物的な機械が、外から引き起こされた刺激によって脳のなかに物質的な観念を作り出す。それに応じて、表象の力に対して協働するように働きかける。つまり外的な知覚によって表象が引き起こされる。この表象は心のうちに自然的かつ必然的に生じるが故に、自然の（感覚的な）表象と呼ばれる」[38]。ウンツァーは、心に表象する機能を認めてはいるが、そのメカニズムは機械論的なものだ。この引用で人間の身体に、動物的な機械という名称が与えられているのは、身体が機械論的に捉えられているからであり、知覚はあくまでも身体レベルでの刺激の伝達現象、ウンツァーの説明によれば、感覚器官が外から刺激を受けると、その刺激が神経を通じて脳の内で物質的な観念 materielle Ideen が作り出される[39]一連のプロセスのことである。

---

31) Krüger, a.a.O.,S.87.　32) Krüger, a.a.O.,S.90.　33) Krüger, a.a.O.,S.769.
34) Krüger, a.a.O.,S.765.
35) Johanna Geier-Kordesch, *Pietismus, Medizin und Aufklärung in Preussen im 18. Jahrhundert*, Tübingen 2000, S.224f.
36) Krüger, a.a.O.,S.780.
37) ウンツァーが受けてきた思想的な影響については下記研究書を参照。Matthias Reiber, *Anatomie eines Bestsellers*, Göttingen 1999, S.25ff.
38) Johann August Unzer, *Erste Gründe einer Physiologie der eigentlichen thierischen Natur thierischer Körper*, Leipzig 1771, S.44.
39) Unzer, a.a.O., S.42.

心そして観念を敢えて物質的と呼んでいるのも、ウンツァーが心を身体と同次元のものと考えていたからであった[40]。このように心を物質的に理解しようとする姿勢の背景には、ロバート・ウィットの神経反応の実験や、神経と脳との解剖学的な連結といった、同時代の神経生理学研究の蓄積が反映されていた[41]。

知覚と表象を機械論的に解明するウンツァーの心の理論のなかでも注目したいのは、知覚が二つに区別されている点だ。ひとつめは、感覚器官が外から受けて神経によって伝わる刺激としての知覚である[42]。そしてもうひとつが外からの刺激とは関係なく、身体や心の内なる状態に由来する内的感覚 innerlicher Sinn または内的知覚 innere Empfindung であった[43]。最初の知覚に対応する表象が、外の物体についての感覚的な表象にあたる。もうひとつの内的知覚に相当するのが、感情 Gefühl であり、心の表象の質感である[44]。本稿の冒頭で感傷性には知覚のふたつの意味が流れ込んでいたことを指摘したが、この知覚の二つの意味は、生理学的な関心によって理論化された知覚の区分、つまり外的知覚と内的知覚の区分に応じたものであったといえるだろう。

クリューガーが算術の夢を引き合いに出していたように、ウンツァーもまた、睡眠状態や夢を手がかりに、知覚と表象の働きを論じている。ウンツァーによれば、夢は、眠っている者の想像力 Einbildung der Schlafenden であり、例えば夢遊病は、心のなかに生じた物質的な観念の残余によって引き起こされた現象、つまり外的知覚ではなく内的知覚の働きによって引き起こされると説明されている[45]。そもそもウンツァーは、夢を主題的に論じた著作も執筆しており、寝床の状態と夢の関係のような、睡眠時における知覚と夢の関係について考察していた[46]。この夢についての著作は、哲学と医学の双方の視点から夢を考察する目的で執筆されたものだが[47]、ウンツァーは、睡眠時の知覚と表象の関係に着目し、睡眠時には暗い表象 dunkle Vorstellung が働いていると指摘する。この暗い表象が夢に相当するのだが、覚醒時の感覚的表象や感情の表象は、活発な知覚に対応した表象であるということが論じられている[48]。つまり夢は、普段は表象にもならない、暗い表象とそれに対応する身体上の知覚を、心が表象していることに気付かせてくれる現象なのである。夢を例証に、知覚や表象として理論化できるものは、人間の心身現象のごく一部であることをウンツァーは論じようとしていたといえるだろう。

---

40) Vgl. Ivonne Wübben, *Limitierte Anthropologie. Grenzen des medizinisch-philosophischen Wissenstransfers am Beispiel von Johann August Unzers Affektlehre (1746)*, in: Manfred Beetz, Jörn Garber, Heinz Toma (Hgg.), *Physis und Norm*, Göttingen 2007, S.51-67; S.56.
41) Vgl. Unzer, a.a.O.,S.402f.　42) Unzer, a.a.O.,S.53.　43) Unzer, a.a.O.,S.88.
44) Unzer, a.a.O.,S.89.　45) Vgl. Unzer, a.a.O.,S.84,
46) Vgl. Unzer, *Gedanken vom Schlafe und denen Träumen*, Halle 1747, S.53.
47) Unzer, a.a.O.,S.14.　48) Unzer, a,a.O.,S.21.

同じような心の深さを示唆していた、ライプチヒの医師エルンスト・プラトナーの議論も検討しておきたい。「知覚というものは、一般に、また広い意味において、状態についての意識 Bewußtseyn des Zustandes である」[49]。プラトナーは知覚を意識といいかえているが、意識は心に生じている「観念を見ている自我」[50]とも言い換えられているように、意識は、ハレの医学者たちが表象または内的知覚の表象と呼んだ現象に相当するものである。このような術語の揺れに、心の探究が理論化の途上にあったことを読み取ることができるのだが、これまで身体レベルでの刺激に相当していた知覚を、心の状態についての表象機能へとずらすことで、プラトナーは、知覚に身体現象と心的現象の双方に浸透する機能をわりあてたともいえる。さらに自己の状態についての意識を心的現象の基盤とすることで、表象 Vorstellung と感情 Gefühl と知覚とが区別されることになった。

まず表象は、表象する主体 Subjekt とは異なる対象についての意識であり[51]、いわゆる人間が外的世界を認識している心の状態に相当する。また感情は、主体の判断についての意識と説明されており、例えば、「これこれの対象が快という感情を引き起こす」という具合に、ある対象と主体の状態とを結びつけている意識に相当する。そして知覚は、主体の状態についての意識であることは既に述べた通りだ。

注目すべきは主体の状態の意識と定義された知覚だ。知覚は、心の状態の意識であるが、具体的に、情動的な心性の動き leidende Gemüthsbewegungen[52]の表象とも言い換えられている。この心性の動きは、刺激や激情 Affekt によって引き起こされる心の動きであり、その動きには、緩急や強弱といった程度の差がある。時には意識の動きを中断させ、まったく新しい対象または予期しなかった対象へと心を向けさせることもあり、驚愕 Erstaunen や恐怖 Schrecken と呼ばれる心の状態に相当するものと説明されている[53]。こうした例からもわかるように、プラトナーは、知覚でもって、認識とも感情とも異なる、心の表象を巻き込むダイナミックな心の動きを捉えようとしていたといえるだろう。

3　心性の動き

このような心性の動きへの関心を歴史的にさかのぼってみると、ハレで活動していたゲオルグ・フリードリヒ・マイアーの研究にたどりつくことになる。マイアーは「心性の動き Gemüthbewegungen」という言葉でもって、心の表象機能全般を視野に入れた心理学を構想していた。

---

49) Platner, *Philosophische Aphorismen*, 2.Aufl., 2.Bd., Leipzig 1782, S.13.
50) Platner, *Philosophische Aphorismen*, 1. Aufl., Leipzig 1776, S.4.
51) Platner, *Philosophische Aphorismen*, Ganz neue Ausarbeitung., 2.Bd., Leipzig 1800, S.647.
52) Platner, a.a.O.,S.652.　　53) Platner, a.a.O.,S.654f.

「心だけを考察してみると、次のことを感じるだろう。心は、先に得られた表象または知覚をそのうちに呼びこそうとするとき、欲求 begehren している。また、先に得られた表象とは別の表象を呼び起こそうとしたり、または知覚を遮断しようしたりするとき、心は拒絶 abscheuen している」[54]。マイヤーが表象と知覚とを同義語であるかのように使用している点については、例えばクリューガーの知覚と表象の随伴関係を思い起こせば納得できるだろう。

引用のなかで重要なのは、既に得られた表象に着目している点だ。マイアーは、心はつねに無数の表象を抱いていると理解していた。心は常に無数の表象に向いているが、特定の表象に向いているわけではない[55]。そこで心が特定の表象に向かうと、その表象が浮かび上がり、その表象は徐々に明晰かつ判明なものへと変化していく。この心のフォーカスの機能を、マイアーは欲求と呼んでいたのであり、逆に表象へのフォーカスをやめること、または別の表象へと心が向かうことを拒絶と説明していた。「心性の動き」は、そもそも情動のこと、つまり心に向かって一方的に働きかけ、心はただ受動するしかない激情を言い表す表現として使用されてきた経緯を思い起こすならば[56]、マイアーは、「心性の動き」を心理学という意味で使用し、表象の動的な生成プロセスを論じたとも言えるだろう。

マイアーの心理学は、ライプニッツそしてヴォルフの心的能力論によって体系化された、表象の明晰判明さの度合いを前提としており、明晰判明さの度合いが増すことで、人間は真理や善を表象することが可能となるという考え方を引き継いだものであった。心がある表象へとフォーカスすることで、ある特定の対象の表象が明晰判明な形をとる。これが認識に相当する表象である。逆に混雑 verworren した表象は、感情の表象となる[57]。マイヤーは、感情という混雑した表象に囲まれている状態を、進むべき道を見通すことのできない、霧に囲まれた散策者にたとえている[58]。表象が混雑していると、目にはいった道を正しい道と拙速に判断してしまうように、混雑した表象は誤謬を招くものであった。

人間が真なる認識を獲得するためには明晰判明な表象を獲得するよう心を働かせることが必要となるが、マイアーは、心が明晰判明に表象できるのは表象のごく一部であって、心の大半は混雑した表象が占めていると論じていた。「情動のただなかにある心 die Seele, mitten in den Leidenschaften は、欲求能力を働かせる力が奪われてしまっている」[59]。つま

54) Georg Friedrich Meier, *Theoretische Lehre von den Gemüthsbewegungen überhaupt*, 2.Aufl., Halle 1759, S.31.

55) Ebd.　マイアーは、心が認識行為をおこなうと同時に、行為の動因でもあることから、欲求という語を使った。

56) Vgl. Thomas Martinec, *Epistemologisches Wissen über Emotionen in der Tragödienpoetik von Gottsched bis Lessing*, in: Sonja Koroliov (Hg.), *Emotion und Kognition*, Berlin 2013, S.11-27; hier S.11.

57) Meier, a.a.O.,S.65f.　58) Meier, a.a.O.,S.161.　59) Meier, a.a.O.,S.162.

り心は激しい感情に駆り立てられているならば、特定の表象へと向かうことができない。このようにマイアーは、心を情動のベクトルに翻弄されるものと考えていた。激しい感情は、「大海での荒波」のように、「心全体に広がり、心の欲求能力の大部分を支配してしまう」[60]。マイヤーによれば、怒りのような突発的な感情の高ぶりや、一種の失神状態 Ohnmacht は[61]、感情によって人間の表象能力が翻弄されていることの例証となる。逆に、明晰判明な表象が優勢であれば、感情を弱めることも可能である[62]。このような荒波にも似た心性の動きを理解するならば、友情を取り結ぶ際にも役に立つだろうというマイアーの言葉[63]からは、本稿の冒頭で言及したラーファターの人間理解、シラーの犯罪者理解と同じ心の探究への関心を読み取ることができるだろう。

4 心の深み

心への関心を推し進めた要因として、1776 年に締め切られたベルリンアカデミーの懸賞論題も考察しておきたい。ヘルダーが投稿したことから、この懸賞論題はヘルダー研究のなかでとりあげられることがあるが[64]、受賞したのは、ベルリンの知識人たちと交流のあったヨーハン・アウグスト・エバーハルトであり、彼が編纂した辞書については本稿でも既に言及している。エバーハルトは受賞後に、上述マイアーの後任としてハレ大学で哲学の教鞭をとることになる。懸賞論文では珍しいことではないが、受賞を逃した多数の論文も同時期に出版されたため、懸賞論題は、この時代の言論の方向性を大きく左右する要因であった。

この論題には、教育学者ヨアヒム・ハインリヒ・カンペも応募しており、彼の論文の冒頭には、論題の趣意が詳しく紹介されている。まずこの論題について確認しておこう。

「人間の心には、その特徴とその働きの結果から、認識力と知覚力という根源的な二つの能力がある」。認識力は、対象を認識しようという能力であり、一方の知覚は、状態に関連する能力であり、快と不快を感じる能力としても言い換えられる。懸賞論題は、このふたつ能力について、1. ふたつの能力が従っている条件はどのようなものか。2. このふたつの能力は関連して働いているのか、それとも無関係なのか。そして 3. 人間の精神の能力と道徳的な性格について、このふたつの能力の程度や活力はどの程度影響するのか[65]、と 3 点から問うものであった。

この論題は、心には認識する能力と、心の状態を知覚する能力のふたつの能力があると論

60) Meier, a.a.O.,S.163f　61) Meier, a.a.O.,S.193.　62) Meier, a.a.O.,S.185.
63) Meier, a.a.O.,S.186.
64) この懸賞論題についての詳細な情報は下記ヘルダー全集のコメンタリーに詳しくかかれている。Vgl. Johann Gottfried Herder, *Werke in zehn Bänden*, 4. Bd., Frankfurt 1994, S.1080ff.
65) Vgl. Joachim Heinrich Campe, D*ie Empfindungs= und Erkenntnisskraft der menschlichen Seele*, Leipzig 1776, S.4f.

じた、ベルリンアカデミーの書記ヨーハン・ゲオルグ・ズルツァーの能力論を反映したものといわれるが[66]、ここにはウンツァーをはじめとするハレの医学者たちの知覚と表象の整理、つまり認識に相当する表象と、主体の状態の表象という区分の影響も反映されているといえるだろう。

エバーハルトは、「心の根本能力 Grundkraft は、表象を抱くことである」[67]と、心に表象能力を認め、アカデミーの論題で示された認識能力と心的状態の知覚能力は、この表象能力の様態 Modifikation の違い[68]であると主張した。確かにエバーハルトは、表象に明晰判明さの程度の違いを認める点で、ライプニッツ、ヴォルフ、そしてマイヤーの表象理論を踏襲したと言えるが、表象の明晰判明さの程度を、心の受動的能力と能動的能力の違いに関連付ける点に、エバーハルトの能力論の新しさを認めることができる。「（心の状態を）知覚している時の特徴は、心が受動的である点にある。他方で、心が思考している時には、能動的である」[69]。心が能動的に表象している時、つまり認識を行っている時には、心は判明に表象しており、どのようにその表象が生じたのかを正確に意識することができるとエバーハルトは説明する。他方で感情を知覚すると心は受動的な状態となり、心は能動的に働くことができなくなる[70]。しかし同時にエバーハルトは、心が感情を正しく表象できている限りにおいて、心は能動的に働いているとも指摘していた[71]。つまり受動と能動というスカラーを持ち出すことで、感情を単純に混雑した表象として処理するのではなく、感情についても能動的に表象することが可能であることを、エバーハルトは論じたといえるだろう。エバーハルトの心理学についての数少ない研究のなかでグローフェも指摘しているように、エバーハルトは、表象するという心の能力でもって、認識と感情とを統一的に説明する理論の構築を試みたと言える[72]。

その意味でも、エバーハルトが、心の受動的な働きに関連付けていた小さな表象への言及が、心のあらたな領域を指し示していたといえる。エバーハルトは、人間の心理を考察すると、自然に反するような原因、善き精霊または悪しき精霊の影響、別の心を持ち出さなければ説明することができない、心の状態の突発的な変化に直面することがあると、あらたな問題を示唆する。「大きな動きはあらゆる小さな動きの総体である」[73]と、エバーハルトは、小さな表象が集まって作用する時、心は受動的に働かざるを得なくなると、心の機構について説明する。「小さな表象の無数の集まりは、小さな心の動きの動因の無数の集まりでもあり、

---

66) Vgl. Peter Grove, *Johann August Eberhards Theorie des Gefühls*, in: Hans-Joachim Kertsche und Ernst Stöckmann (Hgg.), *Ein Antipode Kants?*, Berlin 2012, S.119-131; hier S.122f.
67) Johann August Eberhard, *Allgemeine Theorie des Denkens und Empfindens*, Berlin 1776, S.32.
68) Eberhard, a.a.O.,S.31.
69) Eberhard, a.a.O.,S.35.
70) Eberhard, a.a.O.,S.50.
71) Vgl. Eberhard, a.a.O.,S.128.
72) Grove, a.a.O., S.124f.
73) Eberhard, a.a.O.,S.131.

この小さな表象に対して、私たちは直接に、それを受け入れたり、抵抗したりすることができない。それゆえ、この小さな表象は、ますます私たちの心の根底において働くことができる」[74]。こうした微細な表象が、突如として、活き活きとした知覚（＝感情）となって現れて、心的活動の注意を奪うことで、思考状態にある表象は突如として暗くなってしまう[75]。このようにエバーハルトは、小さな表象に、心の能動的活動を凌駕する力を認めるのだ。

これら小さな表象として、エバーハルトが具体的に指摘するのが、乳母から聞いた昔話 Ammenmärchen のような、幼い頃に根付いてしまった記憶であった[76]。こうした記憶は、謎のままでとどまり続ける räthselhaft bleiben 心の秘密の動因 die geheimen Triebfeder であるとも言い換えられている。この解き明かすことのできない記憶の影響を、今日の私たちは、トラウマまたは精神分析でいう抑圧された記憶に類するものとして考察することもできるかもしれない。しかし本稿で確認しておきたいのは、心の探究によって、本人も理解できない心の深部が想定されはじめたという点である。

心の全てが見通せないという議論は、カンペの懸賞論題にも確認できる。「人間は身体と心からなる存在であり、身体の状態について、明晰な表象または暗い表象を、心は有している」[77]と述べるように、カンペもまた、表象機能を心の基本的な機能として受け入れている。またこの自己自身の表象は、プラトナーと同じように、自己についての意識ともいいかえられている。表象には明晰判明な度合いがあると論じていることから、カンペも表象の度合いについての議論を踏襲していたことがわかる。表象の度合いを説明するために、プリズムを引き合いに出して、たんなる光は混雑した表象であり、プリズムを通して分解された光が明晰判明な表象に相当すると説明してもいる[78]。

カンペの表象理解のなかでも注目すべきは、明晰判明さの度合いの異なる表象が補完するように関係していることの指摘だ。明晰判明な表象といっても、いきいきとした感情の支えがなければ、表象は抽象的にとどまり、現実的な表象 wirkliche Vorstellungen にはなりえない[79]。そこでカンペは、ライプニッツやヴォルフによる表象の定義、つまり対象を構成している徴をすべて列挙できる判明さ distincta はもちあわせないが、対象を同定できる程度の明晰 clara さ[80]をともなっている意識 undeutliches, aber gleichwohl klares Bewustseyn を持ち出して[81]、認識能力と感情つまり知覚能力とが補完的に機能する可能性を指摘している。

---

74) Eberhard, a.a.O.,S.132.
75) Eberhard, a.a.O.,S.138.
76) Vgl. berhard, a.a.O.,S.133.
77) Campe, a.a.O.,S.10.
78) Vgl. Campe, a.a.O.,S.60.
79) Campe, a.a.O.,S.99.
80) Vgl. Gottfredus Guiliemus Leibnitius, *Meditationes de cognitione, veritate et ideis*, in: *Acta Eruditorum*, Nov. 1684, p.537; Christian Wolff, *Vernünfftige Gedancken von Gott, der Welt und der Seele des Menschen, auch allen Dingen überhaupt*, Halle 1720, §277.
81) Vgl. Campe, a.a.O.,S.9.

このように知覚能力を説明することに対応して、カンペは人間の認識能力には限界があることを指摘する。「人間は、自己のすべてを、明晰さといういくらかの光をもってしても in einigem Lichte der Klarheit 、一挙にとらえることは不可能である」[82)]。というのも人間の心は、心が活動しうるという条件においてのみ、認識に相当する表象を持つことができるのであって、睡眠、麻痺、身体の不調、過剰な刺激などによって心の能力が弱まることにでもなれば、すぐさま表象は暗くなり、心は無秩序に動いてしまう eine unordentliche Bewegung[83)]からだ。しかしこの表象に限界をもたらす障害もまた、個々の人間が有する性格というものを考える上で重要な役割をはたしている。というのも、万人が同じ性向や激情を有しているわけではないのだから、人間の心的能力が受ける影響は同一ではないし[84)]。そもそも人間を構成している身体のおかれた状況からも、心的能力は様々な影響を受けているからだ[85)]。心を考察してみても、心が受ける身体からの刺激や感情の影響の全てをあきらかにすることはできない、しかしこの影響が多様であるからこそ、人の心はそれぞれ異なることになる。このように心に多様性を認めることで、行為や表情の原因として心を探究することが可能になったのはいうまでもない。

以上、心の探究に関連する 18 世紀の複数の論説を通覧してみた。それぞれの論説には、もちろん矛盾する論点も含まれているが、心をとりまく言説の俯瞰図を描くために、論説の核となる主張だけをとりだすことにつとめた。今後は、この見取り図を手がかりに、本論考で言及した個々の議論をより詳細に検討することにしたい。

---

82) Campe, a.a.O.,S.10.
83) Vgl. Campe, a.a.O.,S.10f; S.140.
84) Campe, a.a.O.,S.140.　85) Campe, a.a.O.,S.143.

Tiefe Seele – Überblick der Theorien von der Empfindung und der Vorstellung im 18. Jahrhundert

Kotaro YOSHIDA

Im 18. Jahrhundert wurden die Ursachen für kriminelle Handlungen in der Psyche des Menschen gesucht und auch die Schönheit und Hässlichkeit der Mimik wurde mit der Schönheit und Hässlichkeit der Seele in Verbindung gebracht. Insgesamt sollte die Tiefe der Seele erforscht und die Seele als Ursache für menschliches Handeln begriffen werden. Dieser Beitrag gibt einen Überblick über die historische Entwicklung der Auseinandersetzung mit der menschlichen Seele und ihren Anfang im Deutschland des 18. Jahrhunderts. Damals verfolgte man zur Ergründung der menschlichen Seele zwei Hauptansätze: einen physiologischen und einen psychologischen. Physiologisch (Stahl, Krüger und Unzer) sprach man vom Geist als einem Mechanismus der Nervenübertragung von Reizen, während die Psychologie (Meier und Platner), aufbauend auf der alten Theorie des Temperaments und den Erkenntnissen der Physiologie, von der Seele als einem Ort sprach, an dem Reize und Vorstellungen produziert werden. In dieser Reihe von Auseinandersetzungen mit der Seele wurden ihre unbekannten Mechanismen diskutiert: etwa kleine Vorstellungen der Seele oder kleine Bewegungen der Nerven. Die Entdeckung dieses bis dahin unbekannten Teils der Seele, der heute Traumata und verdrängten Erinnerungen entspricht, war eine Grundlage für die eigentümliche Haltung dieser Epoche der Suche nach Ursachen in der Seele.